伯耆町障害者老人をささえる家族の会

知ってください私たちの会を！

介護体験記②
認知症の義母を十五年間介護して

十五年前に義父が他界した途端、物盗られ妄想が始まった義母を、在宅で介護をしています。

病院で認知症だと診断してもらい薬の服用を続けていましたが、診断してもらった時には、かなり進行していましたので、その後も目に見えて症状は進行していきました。

マッチ等は目の届かない所に隠していましたが、近所から借りたと言って風呂をわかそうとします。また行動範囲が広くなって、夕方に行方がわからなくなり捜してまわることもありました。

そんな時は、自分の衣類などを荷造りして近所の家に行っていました。尋ねると、『実家だ。』と話すのです。

近所の皆さんにはご迷惑をおかけし、想像のつかないことばかりでした。

そんな義母も、数年後骨折で入院したのをきっかけに症状が落ち着き、退院してからは私に体を全部預けてくれて、甘えて子供のようになりました。そして、今までのようなひどい妄想がなくなりました。

ぼけても「心」は生きている

認知症になると誰にでも現れる症状として、記憶障害があります。

例えば、自宅を出て行方がわからなくなるというケース（徘徊）では、今いる場所がどこかわからなくなって、自分の家に帰らなくてはいけないと思い、出掛けていくのです。そこにはきちんとした理由があるのです。

ちなみに「実家に帰る」とか「会社にいく」という行為は、かつて自分が心安らかにプライドを持って暮らしていた時代に帰りたいという思いからではないかといわれています。

自分のものがなくなるというケース（物盗られ妄想）では、どこに置いたかを忘れてしまうのですが、自分ではなく誰かが持っていったのだと思えれば、自分の気持ちが少し楽になるので、それが物盗られ妄想となっていくのです。

認知症になっても、喜怒哀楽の感情や、今まで生きてきた人生やプライドは失われないのです。だからこそ、忘れていく自分を認められなかったり、不安感でつらくなったり、できなくなっていく自分が情けなくなったりと、本人はいつもいろんな思いをしています。

そんな不安感や喪失感を本人なりに何とかしようと努力して、徘徊・幻覚・妄想・弄便（便をいじる）・不眠・攻撃性・収集癖などの症状が出てくるのです。

家族や介護する人が、そんな本人の思いを理解するまでは、注意したり怒ったりして何とかしようと頑張る葛藤の日々で、精神的に負担です。でも、介護される本人の不安感や、それまで頑張って生きてきた人生をわかろうとした時から、少しずつ介護が楽になってきます。

介護する家族が精神的に安定すれば、介護される本人も落ち着き、認知症の症状も落ち着いてきます。

私たちは、家族の集いの中で会員の皆さんの話を聞きながら、そのことをいつも実感しています。

昼間の会も計画しました。
今後の家族の集い

【とき】
二月二十三日（木）
午後一時三十分～

【ところ】
岸本保健福祉センター

【とき】
三月二十三日（木）
午後七時三十分～

【ところ】
溝口中央公民館

【問合わせ先】
代表世話人　大森紀子
☎六二―七一四三
福祉課
☎六八―五五三五